

はじめに

スマホの問題を差し置いて、指導を考えるのが難しい時代

スマホやケータイ、ネットの問題を差し置いて、子どもたちへの指導・かかわりを考えるのが難しい時代になっています。日常のささいなトラブルから、いじめや不登校にまで関連してきます。ですから本書では、スマホ等に関連した事例や話題を紹介しながら、どう対応していくか、「指導・かかわりで迷わないためのポイント」をまとめていきます。

ただ、そうはいっても、スマホに象徴される「流行」への対応だけで事が足りるほど教育の世界は甘いものではありません。また、「流行」への対応を支えている基盤は、昔から変わらない「不易」の部分です。「不易」の部分は、数学の公式のように明文化はなかなか難しいのですが、これまで私が経験したさまざまな事例を積み重ね、今まで考え続けてきた知恵のすべてを投入してポイントを整理しています。

実は、私は「生徒指導・教育相談はそんなに難しくないと」思っています。難しくないどころか、「不易」の部分に常に意識しながらかかわっていけば、「ずいぶん簡単になる」「指導・かかわりで迷わない」と思っています。この本では、そのあたりの極意をまとめることができたかと考えています。

私は、まったく力のない若い教師でした。本書では、そんな私が子どもたちに教えられて、少しずつ教師らしくなっていった軌跡も

包み隠さず書いています。

私のような力のない教師でも、少しは子どものためになることができた。誰でも方向を間違わずに努力できたら、子どものためにいい先生になれる。少なくとも、今より少し、子どものためになれる。そんな思いで書きました。

教師になりたての私のエピソードをちょっと紹介します。

「俺の背中を見て盗め！」

竹内「A先生、相談があります。生徒が授業を聞いてくれないんです。どうしたらいいですか？」

先輩「どアホ、聞いてどうする。俺の背中を見て盗め！」

新任の私（22歳）と先輩（40代）の会話です。

私は彼の背後に回りました。彼のシャツの背中の部分に、何か秘訣になるような言葉がプリントされていると勘違いしたのです。

「アホか、おまえ」

私は大まじめだったのですが、下手なジョークと勘違いされ、先輩に頭をはたかれ、ダメ出しのオンパレード。最もショックな言葉は「おまえは顔が悪い」です。「ニコニコしてるからなめられる」と言うのです。

「おまえがなめられるから、まじめな子が授業を受けられない。おまえの責任だ」

次の日、意を決した私は……

猛省した私は翌朝、歯磨きしながら鏡に向かい、怖い顔をする練習をしました。

「こら！」

「ごりゃあ！」

「じゃかあし〜」

授業で満を持して「ごりゃあ！」。

一瞬しーん。しかし、生徒たちはニヤッと笑ってまたざわざわ。放課後、半泣きで先輩に相談したら、飲み連れて行ってくれました。

「おまえは意気込みが弱い」

「しばくくらいの気迫を持て」

「しばく」は大阪弁で「叩く」とか「殴る」の意味。もちろん、体罰はダメなので、「それくらいの気持ちで」という意味だったのでしょうが、切羽詰まっていた私は、その夜、枕を殴る特訓をしました……。

次の日の授業、精一杯の声で「ごるああ〜」と叫び、教卓を思い切り叩きました。決死の思いでしたが、生徒を殴ることなどできません。さすがに鬼気迫るものを感じたのでしょう。生徒は水を打ったように静かになりました。一瞬の間を置いて、一番前に座った女の子が、

「かずおちゃん、どないしたん？」

「誰が、かずおちゃんじゃ、×▼■◎……」

言葉になりませんでした。不覚にも泣いてしまいました。そして、問わず語りに生徒に心情を吐露してしまいました。

A先生に相談。怒鳴る練習や殴る練習。うまくいかずどうしていいかわからない……。

生徒たちは「わかった。授業やり」。その後、しーんと聞いてくれました。

その後、どのクラスも静かに授業を受けてくれて、学校が天国に

思えました。夜も眠れず、家を出るとき靴を履く瞬間からずっと吐き気をもよおし……というのが嘘のようになりました。

「俺もやっと一人前になれた」と思いました。

「あかんわ、先生の授業、おもしろいって！」

しかし、1週間くらいたって、女子生徒たちに「あかんわ、先生の授業、おもしろいって！ もう限界」と詰め寄られました。どうしていいかわからなかった私は、授業で、生徒たちに自分の授業の何が悪いのか、聞いてみました。

「雑談はいらない、私は勉強がしたい」

「大阪弁が早口で聞きづらい」

「自分で質問して、自分で答えてる」

「教科書ガイドと同じ」

「塾の先生がヘンな板書だって言った」……

そうなんだ。彼らは何となく聞かないんじゃなくて、理由があって聞かなかったんだ。授業を聞かない生徒たちが問題なのではなく、生徒にとって意味のある、楽しい授業をできていない、自分自身が問題なのだとやっと理解できました。

やっとスタートラインに立ちました

とにかく、わかりやすい授業をやろう。教材研究を繰り返し、授業ごとにアンケートでダメ出しを求めました。最初はアンケートに無反応だった生徒も、続けていると書いてくれるようになりました。なかには「ましになってきた」とほめてくれる生徒も。

その後、授業がましになったのか、だんだんと授業が成立するよ

うになっていきました。

こう書くとサクセスストーリーみたいですが、最近、同窓会で当時の生徒から衝撃の事実を聞かされてしまいました。

『「かずおちゃん、一生懸命やから授業聞いてあげよう。騒いだらかわいそう』ってみんなで言ってたんやで」だそうです。

「不易」の部分を押さえた上で「流行」の部分に対応する

現在、子どもたちのトラブルの多くは、LINE（ライン）という無料でメールや通話などができるサービスが発信源となっています。この「流行」も、何年後には別のものに替わっているかもしれません。ポケベル・ピッチ・ケータイ・スマホ……。メール・チャット・ブログ・プロフ・Twitter（ツイッター）・LINE……。そんなふうに、子どもたちは常に新しいコミュニケーションツールを希求してきているのですから。

「友達とつながりたい」という思春期・青年期の切なる願い、つまり「不易」の部分を押さえた上で「流行」の部分に対応していくと考えれば、LINEが別のものに置き換わっても恐るるに足らずです。そういう意味で、この本の寿命も「不易」でありたいと強く願っています。

本書はプロローグ・流行編・不易編の3部構成になっています。まずはプロローグをお読みいただき、「流行」と「不易」がどのように相互補完するのかのイメージを持っていただければ幸いです。

2014年4月

竹内 和雄